Title	足利義政文芸資料考：家集および連歌資料について
Sub Title	
Author	川上, 一(Kawakami, Hajime)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2020
Jtitle	三田國文 No.65 (2020. 12) ,p.41- 68
JaLC DOI	10.14991/002.20201200-0041
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20201200-0041

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

足利義政文芸資料考

——家集および連歌資料について——

川上 一

はじめに

一、足利義政の家集…分類と伝本一覽

足利義政（一四三六—一四九〇）の和歌事績は、幼少期より晩年に至るまで約四十年間におよぶ。現存歌はおよそ千五百首。歌風を帰納的に分析するに堪うる数である。

しかし、これら現存する和歌のうち、読解に適した状態にあるものは未だ少ない。未翻刻のものも多く、また、翻刻された資料についても、然るべき本文批判を経たものは僅かである。

本稿では、こうした現状に鑑み、義政のまとまった和歌資料として知られていたものの、専門的検討がなされてこなかった家集二種（部類本・定数歌集成）につき、基礎的側面の検証を行う。

また、調査の過程で見出された義政文芸資料の善本、肥前島原松平文庫蔵「飛鳥井栄雅歌書写」外題写本群を軸に、先行研究において共通理解が不足していた義政の連歌資料に関しても整理を行い、向後の読解利用に備えることにしたい。

義政の家集を検討するにあたり、まず諸本の整理を行いたい。

義政の家集は、先学により(1)部類本、(2)定数歌集成、(3)歌会詠集成の三種の存在が指摘されており、伝本についても『私家集伝本書目』¹⁾にはほぼ網羅されている。但し、その分類は現存諸本の全体に及んでおらず、家集の名称についても種別によって統一されているわけではない。このため、現状『国書総目録』をはじめとした目録類の分類では混同が生じている。ここでは現存の確認できる義政の家集、三種二十六本を蒐集し、その再分類を示した。家集各種の代表書名は「新日本古典籍総合データベース」の統一書名により、伝本を概ね書写年代順（推定含む）に掲出した（「」内は現蔵者の登録書名、（ ）は請求記号、【 】は略称）。

(1) 慈照院殿義政公御集 (部類本)

* * *

第一類

① 国立歴史民俗博物館蔵高松宮家伝来禁裏本「慈照院殿義政公御集」(H・六〇〇・四九四)る函二一七) *『新編私家集大成 中世四』底本 外題靈元天皇宸筆 江戸前期写

【高】

② 東北大学附属図書館狩野文庫蔵本「慈照院殿義政公御集」(四・一〇六九〇・二) ※二冊本のうち「乾」(上) ※卷末増補あり 写「左京市人蔵本」印あり【狩A】

③ 静嘉堂文庫蔵本「慈照院殿義政公御集」(五二二・二二二・二二四一七) ※卷末増補あり 写「松井蔵書」誠「「羈旅ノ之臣」印あり【静】

④ 神宮文庫蔵本「慈照院殿家集」(三・二二六) ※卷末増補あり 写【神】

⑤ 国立公文書館蔵本「慈照院殿義政公集」(二二七・一一)

※賜蘆拾葉卷三六 ※卷末増補あり 天保十一年写【拾】

⑥ 後鑑卷三五七(義政將軍記附録卷三)「御集」【後】

⑦ 続群書類従卷四二七「慈照院殿義政公御集」 ※卷末増補あり 刊【群】

第二類

⑧ 宮城県図書館伊達文庫本「義政公御集」(伊九一・二五八・一二) 写【伊】

⑨ 青山歴史村本「義政公御集」(二六二) 江戸前期写【青A】

(2) 源義政集(定数歌集成)

第一種(寛正三年百首・文明元年百首・文明四年百首・文明十三年百首・文明十七年五十首・文明十七年百首)

① 宮内庁書陵部蔵御所本「源義政集」(五〇一・六九九) 江戸初期写【御】

② 祐徳稲荷神社中川文庫蔵本A「慈照院殿家集」(二五〇) 正保元年奥書 写【祐A】

③ 慶應義塾図書館蔵本「慈照院義政集」(一一〇X・五九五・一) 江戸前期写【慶】

④ 青山歴史村蔵本「慈照院殿集」(二五二) 江戸前期写【青B】

⑤ 島原図書館肥前島原松平文庫蔵本「義政公集」(二三七・一〇) 江戸前期写「尚舎源忠房」文庫印あり【松】

⑥ 祐徳稲荷神社中川文庫蔵本B「源義政公家集」(六・二二二/八九五) 写【祐B】

⑦ 天理図書館蔵本「源義政集」(H九一一・二五・タ三) 江戸後期写「津田」竹柏園文庫印あり【天】

⑧ 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵本「詠百首和歌」(九一一・ト一六八・一) 江戸後期写【斯】

⑨ 国立公文書館蔵本「詠百首和歌」(二〇一・〇四六三) * 古典文庫「中世百首歌 八」底本 写「秘閣/図書/之章」(乙種)「日本/政府/図書」印あり【内A】

⑩ 国立公文書館蔵本「慈照院殿五百首和詞并五十首」(二〇一・〇五五八) 写「書籍/館印」「浅草文庫」「和學講談所」「日本/政府/図書」印あり【内B】

①国立国会図書館蔵本「詠百首和歌義政公集」(ゑ・五) 写
「和學講談所」印あり【国】

②安田女子大学図書館稲賀文庫蔵本「東山慈照院源義政公御集」(イナガ・B・〇二二) 天保十一年写【安】

③東北大学附属図書館狩野文庫蔵本「慈照院前左大臣義政公詠」(四・一〇六八九・一) 写【狩B】

④国立公文書館内閣文庫蔵本「義政公五百首」(二〇一・〇四五七) ※文明十七年百首なく、末尾に和歌二十首が付される⁽²⁾ 写【内C】

第二種(寛正三年百首・文明元年百首・文明四年百首・文明八年百首・文明十三年百首)

①東北大学附属図書館狩野文庫蔵本「慈照院殿義政公御集」(四・一〇六九〇・二) ※二冊本のうち「坤」(下) 写
「左京市人蔵本」印あり【狩C】

②刈谷市中央図書館村上文庫蔵本「着到百首和歌」(W一七九二) 写【刈】

(3) 慈照院前左大臣義政公詠(歌会詠集成)

①前田育徳会尊経閣文庫蔵本「東山殿御詠」(一三・二一・書) ※室町殿月次歌会の義政・雅親詠の抜書、紙背文書あり 室町末期写【尊】

* * *

分類に際して新たに取った処置を記す。

家集(1)は、後述するように、本文や歌順等の特徴から系統を

二種に分類できる。ここでは通行する【高】の本文系統を第一類、【高】内の校合注記において「他(イ)本」と称される系統に比定できる【伊】以下を第二類とした。

定数歌集成の家集(2)は、収録される百首歌(五十首歌)の出入りにより二種類に細分される。このため新たに第一種・第二種とし、これを掲出した。なお、このうち第二種に配した【狩C】は、家集(1)の【狩A】と一具の上下二冊本である。

【狩B】は、『国書総目録』等で家集(3)(歌会詠集成)として配されているが、実際は家集(2)第一種である。但し、該本の書名「慈照院前左大臣義政公詠」は、現状、目録類における家集(3)の統一書名として採用されている。そのため、本分類においても、家集(3)の代表書名として書名のみ残している。

本稿では以下、この分類をもとに、家集(1)・(2)を取り上げ、本文やその問題点について検討を加えたい。

二、慈照院殿義政公御集の実際

慈照院殿義政公御集(以下「家集(1)」で統一)は、続群書類従所収。【高】を底本に『新編私家集大成』にも収められており、現時点で最も著名な義政の家集である。成立時期は不明(但し他撰)。文明八年百首及び、慈照院自歌合に取材していることが早く指摘されており、これらの詠を軸に、前半は四季恋雑の部類、後半は雑纂形式で編集されている。伝本によるが、概ね三百二十首ほどの集である。すでに道興等、他人の詠が混入している旨指摘があり、義政純粹の家集でないことが知られている。

ただ本集に關し、その伝來や全体の内容について調査に及んだ研究はない。出典の明らかでない詠も多く残されており、それらが義政の真作として信頼に堪うるものであるのか、改めて検証してみる価値はあるだろう。

まず、家集(1)の伝本や本文に關して基礎的なことを述べる。

伝本は、前項に示したごとく九本である。このうち靈元院(一六五四—一七三二)の外題により伝來が明らかな【高】が、享保以前の写。他の伝本も江戸前期を遡らず、古写本は存在しない。諸本、卷末に義政の略伝と水無瀬氏成(一五七一—一六四四)の本奥書をそなえるが【青】等、署名を欠く伝本もある)、公刊の翻刻を含め本文が乱れているものが多い。ここでは、最も意味の通る【伊】の奥書を以下に掲げる(読点、〔 〕は稿者。本文の空白はママ)。

公方慈照院殿義政公 号東山殿、室町公方 私考云、延徳二年正月七日、前征夷大將軍従一位左大臣准三宮源義政薨、歳五十六、法名喜山道慶、大政大臣被贈官、慈照院卜号、嘉吉三年ヨリ延徳三年迄治世四十九年也、東山東求堂閑居、銀閣ヲ造、古器古繪等ヲ集翫給、世間流布之御百首、引合見侍ル御詠共露頭、尤不可出窓外重寶、穴賢々々、不慮従田舎到來、一日之中令書写畢、本書之手跡公方室町殿義政公筆也、證本不可有疑候者也

寛永十年己酉八月三日

水無瀬三品氏成判

この奥書、【高】では「不慮従田舎到來」以降が改行、且つやや小字で書写されており、これ以降が氏成の奥書ということ

かもしれない⁽⁷⁾。いずれにせよ、他人の詠が混じる家集(1)に「義政公筆」本が存在していたとする内容は信用できるものではない。また、氏成の位階も誤っており(寛永十年(一六三三)は従二位)⁽⁹⁾、この奥書の真偽は大いに疑いもたれる。

本文に關しては、【高】書写の時点で既に乱れが生じていたようで、同書には二十三枚にも及ぶ本校合の紙片(本文同筆)が挿入されている。そして、この「イ(他)本」に該当すると思われるのが、【伊】以下、第二類とした系統の伝本である。系統内で細かな出入りは存するが、その本文は第一類【高】の校合本文にほぼ一致する。中でも決定的なのは、【高】に挿入される次の注記である。

舟人そ——まこもかりなる^{ろイ}——

寄松祝 祝言二首他本岸柳ノ次ニアリ

一行目は、卷末に近い「江船」詠(三二六 ※私家集大成番号以下同)の校合注記であり、この箇所は【伊】では、舟人そ心かしこきみしま江にまこもかる世をはうらみに

と、校合本文(傍点部)に一致している。重要なのは、続く二行目の歌順に關する注記である。【高】では巻軸にある「寄松祝・祝言」詠(三一八・三一九)が、他本では「岸柳」詠(三〇九)の次に位置している、という指摘であるが、【伊】他の第二類本では、はたして、

岸柳

／をそくとく色こそみゆれ春秋のくるかたかはる岸の青柳

寄松祝

今日ひかん御前の山の小松はら千代の子日もきみかためとて

祝言

いく世まで下葉の塵のつもりけん雨雲かゝるきしの松か枝

と注記通りに配されている。¹⁰⁾ 第二類の系統が、【高】のいう

「他本」であるのは明白である。

ただ、こうした細かな本文・歌順の異同は存在するものの、第一類と第二類の間には、本質的に「異本」と呼ぶ程の差異は認められない。両者を同一の書と捉えて家集(1)の全体を検討することに問題はない。

全体の考察に入る。すでに指摘されるように、家集(1)は他書の詠に取材し、題ごとに部類した二次的な編纂物である。ここでは、本書に収められる他出詠(出典歌)を可能な限り蒐集することで、その編集実態を明らかにすることにした。【高】を基礎に家集(1)三百二十首の出典歌を調査した結果を一覧したものが「別表」(巻末)である。

全三百二十首(重出歌八首)のうち、出典が明らかとなった詠は二百八十八首である。以下に内訳を掲げる(「」内は義政の真作詠の数)。

- ①文明八年百首 100 (99) 首 ※雅親との巻末贈答歌を含む
- ②慈照院自歌合 91 (91) 首 ※うち一首は重出
- ③続撰吟抄 45 (10) 首
- ④將軍家千首 38 (15) 首
- ⑤草根集 6 (0) 首

⑥康正元年内裏歌合 5 (5) 首

⑦雅康卿詠草 2 (0) 首

⑧公宴統歌 1 (1) 首

・ 出典不明 32 (二) 首

従来の指摘通り、①文明八年百首、②慈照院自歌合の大部分の採歌が認められる他、③続撰吟抄、④將軍家千首、⑥康正元年内裏歌合等の歌書に取材していることも新たに把握される。

ただ、明らかのように、③続撰吟抄・④將軍家千首詠の半数以上は他人の和歌である。単なる混入というには量が多く、また⑤草根集・⑦雅康卿詠草の採歌に至っては完全に他人の家集を利用している。その編集態度は、明らかな作為を感じさせるものがある。このような現状であるため、残る出典不明の独自歌三十二首に関しても、ただちに義政の真作詠と判断することは難しい。

また、真作と判断できる詠に関しても問題がある。②慈照院自歌合(以下、自歌合)は、家集(1)に九十首を所収するが、その歌題は義政詠作時のものではない。本書については、前号で基礎的な考察をおこなったが、その実態は「義政が過去の自詠百首を、歌題を除いた上で五十番の歌合としたもの」である。家集(1)の編者が自歌合から和歌を採歌した段階では、歌題のない状態であったと思われる。ところが、家集(1)の自歌合詠には全て題が付されており、それらは自歌合の出典の歌題と必ずしも一致していない。¹²⁾

これらの題は、和歌の内容を参考に、家集(1)の編者が新たに付したものと思しい。中世和歌の主流である題詠は、予め出題

された歌題に対し、その題意を満たすことを目標に作歌するものである。後に補われた題は、歌人の作意をかえつて曖昧にしてしまう。義政詠を読解する上では大いに支障となるもの、と言わざるをえない。

今回、改めて家集(1)、慈照院殿義政公御集の全貌を追ってみたが、明らかに変わったのは、その杜撰な編集態度と、利用に供したい本文の様相である。このようにみていくと、先に掲げた水無瀬氏成の奥書も偽作の可能性が高いように思われる。おそらく奥書にある寛永十年八月以降、本書の作成と同時に、何者かによって付されたものではなかるうか。

こうした集が編まれた経緯・意図は全く不明であるが、編纂に用いられた歌書①～⑧は、本書の成立時(江戸時代初期)の段階では、どれも世上に流布していたとは言い難いものばかりである。¹³⁾すると編者は自然、これらの書物を扱える地位にある人物となるが、現状、追究する術を持たない。後考を俟ちたい。

三、源義政集と松平文庫蔵「飛鳥井栄雅歌書

写「外題歌書

源義政集(以下「家集(2)」で統一)は、義政の定数歌を集成した歌書である。義政の定数歌は、現在十一種が確認されており(多くが百日百首の日次詠草である)、家集(2)はそのうち、①寛正三年百首、②文明元年百首、③文明四年百首、④文明十三年百首、⑤文明十七年五十首、⑥文明十七年百首の六種(五百五十首)を収めている。同類の書として五種の定数歌をまと

めたものがある(【狩C】・【刈】)。これには⑤・⑥がなく、代わりに⑦文明八年百首を所収する。厳密には別の書であるが、重複する定数歌も多く、同系統の本文が利用されているため、本稿では六種のを第一種、五種のを第二種として一括した。以下では第一種を中心に述べる。

義政の定数歌の大部分は、すでに古典文庫『中世百首歌八』¹⁴⁾に翻刻があり、家集(2)も【内A】を底本に収録されている(対校本に【書】・【内B】)。家集(1)と異なり、すべて義政の真作として疑いなく、詠作年代も把握できるため、今後の読解において基礎となるべき資料である。

しかし、現状、古典文庫の翻刻本文をそのまま利用することは難しい。家集(2)は、善本というべき写本に恵まれず、諸本間に相当数の異同が生じているためである。同書の解題も述べるように、本文批判が課題として残されている。

但し、先に掲げた伝本十四本の本文を一覧するに、現存の家集(2)は全て同一の祖本に端を発する系統である。そのことは、諸本に共通する脱落歌の存在によって把握される。脱落しているのは以下の三首である(歌番号は古典文庫による)。

・①寛正三年百首「閏月」詠(四五)

・⑥文明十七年百首「寄嶺恋」詠(六一・六二の間)

・⑥文明十七年百首「寄原恋」詠(六五・六六の間)

以上の脱落歌を有する家集(2)諸本の伝来について、一応、最古の情報を伝えるのが【祐A】の正保元年(一六四五)¹⁵⁾の奥書である。

慈照院殿義政公家集五百五十首、鳥丸大納言光廣卿以直本

寫之者也

正保元年十二月二日

正保改元は十二月十六日であり、大いに不審の残る内容であるが、ひとまずこれに従うと、家集(2)は烏丸光広(一五七九—一六三八)の活躍期に、すでに現在の「五百五十首」本の形で存在していたことになる。いづれにせよ、この「祐A」についても前述の三首を欠いている。わずか三首ではあるものの、家集(2)は定数歌集成として成立する初期段階から本文に不備を抱えていた書ということになる¹⁶⁾。

幸いなことに、こうした家集(2)の不備を補いうる伝本が現存している。肥前島原松平文庫に蔵される、外題に「飛鳥井榮雅歌書写」という注記をもつ一連の写本群で、以下の五点六冊である(以下「松平文庫本」と総称する。家集(2)の定数歌番号と区別するため白抜き数字を用い、矢印で対応関係を示した。「」は登録書名、()は請求記号)。

- ①「着到百首 寛正三」(一四〇・一八) 二冊
↓①寛正三年百首(上)、②文明元年百首(下)
- ②「独吟百首 文明十三」(一四〇・一九)
↓④文明十三年百首
- ③「五十首和歌 文明十七・四・十三」(一四〇・二〇)
↓⑥文明十七年五十首
- ④「着到歌 文明四」(二四〇・二二)
↓③文明四年百首
- ⑤「着到歌 文明十七」(二四〇・二二)
↓⑤文明十七年百首

以上は全て同装の写本である。簡単に書誌を示す。

〔江戸前期〕写。袋綴。薄緑色の無地表紙(二七・一×二〇・六糎)。

外題は、何れも左肩に貼題簽、同筆にて①「着到百首(寛正三年九月九日)」(上冊)、「着到百首(文明元年九月九日)」(下冊)、②「獨吟百首(文明十三年)」、③「五十首哥(室町大納言家/文明十七四十三)」、④「着到哥(文明四年)下」、⑤「着到哥(文明十七年九月九日始之)上」と墨書。④と⑤は、本来上下冊とされていたようである。

全て脇に「飛鳥井榮雅歌書写」との注記がある。本文と別筆。内題は、①「詠百首和哥(寛正三年)」(上冊)、「着到(文明元年九月九日始之)」(下冊)、②「詠百首和歌」、③「詠五十首倭哥」、④「詠百首和歌(文明四年/九月九日始之)」、⑤「着到哥(文明十七年)」。料紙は楮紙。遊紙なし。半葉十一行、和歌一首二行書。本文は各別筆。①(上)の冒頭に「義政」との署名。②に「右百首者文明十三年冬比詠之/一首不及思案初一念馳筆耳/外見有憚左道々々」と義政の識語がある。松平文庫本には珍しく印記がない。

これらは従来、外題の注記から飛鳥井雅親(榮雅)の著作と認識されていたものである¹⁷⁾。最近、浅田徹氏によってすべて家集(2)の内容に一致する義政の定数歌であることが明らかにされた¹⁸⁾。ただ、氏の論考は雅親の定数歌の基礎的整理を主眼としていたものであったため、いま改めて義政研究の立場から該本の伝来や本文に言及したい。

まず、松平文庫本は先述した家集(2)の脱落歌三首を有している。

廿四日 関月

さ枝もる竹のしたみちたとらてや

月にもこゆるあしからのせき ①「着到百首 寛正三」

十一日 寄嶺恋

ゆくすゑのちきりはいつと時しらぬ

やますもふしのねにやなかまし ⑤「着到歌 文明十七」

十六日 寄原恋

いつまてかつれなき色にとしをへて

しけさそふらむ恋の松はら ⑤「着到歌 文明十七」

このことは、該本が家集(2)の現存諸本の単なる「分写」ではない、異なる伝来を辿った写本であることを示している。伝来の手掛かりとなるのは、外題にある「飛鳥井栄雅歌書写」との注記である。浅田氏の指摘にもある通り、これは「雅親筆と伝える書卷」の転写であることを伝えるものと解すべきだろう。松平文庫本の親本として、飛鳥井雅親筆の義政の定数歌写本が存在していたとしても特に不審はない。雅親は義政の歌鞠の師範であり、且つ能書でも名高い。義政が自詠の清書を依頼することは大いにありうる。

本文の有りようもこうした推定を妨げない。松平文庫本の本文は、家集(2)の錯綜した本文に対して極めて良質である。各定数歌における例を挙げよう。先に古典文庫の本文を掲げ、次いで松平文庫本の本文を示す(校異に示した略号での書は

【御】、内は【内B】)。

①寛正三年百首「折花」

15あかなくに折りてそかさす桜花老かくすへきたためならぬみに(全らぬま書)

あかなくにおりてそかさすさくら花老かくすへきたためならぬ身も(しならぬ内)

②文明元年百首「関居」

88庭はあさち門はむくらにとちはてし人めはれぬる宿のさひし(か書内)

さ庭はあさち門はむくらにとちはて、人めかれぬるやとのさひし(か書内)

③文明四年百首「古宅月」

50朽まさる軒の板間もさもあらはあれすは月の影もらしを(あれすは書内)

くちまさる軒のいたまもさもあらはあれあれすは月のかけも(さし内)

もらしを

④文明十三年百首「隣家竹簷」

5間近くも声そきこゆるあしかきのこす竹にうつつる鶯(ナシ書)

まちかくもこゑそきこゆるあしかきのすゑこす竹にうつつるう(下句ナシ内)

くひす

⑤文明十七年五十首「庭霜」

33露はらひもとし道もみえぬまで霜降わくる蓬生のやと(秋書)

露はらひもとしみちも見えぬまでしもふりはつるよもきさふ(庭内)

のやと

⑥文明十七年百首「湊千鳥」

10もえ出る軒の忍に露みえて雨は春なき夕くれの宿(音書内)

もえいつる軒のしのふに露みえて雨はをとなきゆふくれのやと(初内)

と

①・④は独自本文、②・③は伝本の一つに一致する本文、⑤・⑥は諸本の長所を併せ持つ本文である。いずれの歌においても、松平文庫本は本文・歌意の上で、安定した優等性を示している。

結論すれば、松平文庫本は家集(2)の不備を補うばかりでなく、伝来や本文においても上位に位置する善本である。今後の読解において尊重されるべき伝本といえる。

以上、家集(2)の本文上の問題を端緒に、松平文庫蔵本の重要性を述べたが、実はこの「飛鳥井栄雅歌書」という外題注記をもつ写本は、連歌資料にも存在している。義政の連歌著作に関わる重要な問題であるため、項を改めて詳説する。

四、義政の連歌資料について

義政のまとまった連歌資料としては、後鑑所引の御連歌集が夙に言及されている。これは同書「義政將軍記附録」巻七から巻十にかけて所収される一連の句集のことであり、すなわち、

- ①「発句之事（自文安五年八月／至寛正六年十二月）」（巻七）

②「連歌之事、愚句（自長祿三年／至寛正六年）」（巻八）

③「連歌之事、愚句（自寛正七年／至文明十一年）」（巻九）

④「連歌之事、独吟百韻（長祿二年二月五日／応仁元年十月十七日）」（巻十）

の四部、金子金治郎氏が新撰菟玖波集の撰句資料として注目し、「義政句集」と総称しているものである。このうち①に関するは、柿衛文庫に単独伝本が蔵されており、また、④のう

ち、応仁元年百韻は、統群書類従所収本（巻四八二）の他、複数の伝本が存在している。一方で、残る②・③・④（うち長祿二年百韻）に関しては、後鑑のみに所載される孤本と考えられてきた。

しかしながら、前項に述べた松平文庫蔵「飛鳥井栄雅歌書」外題注記本の連歌資料こそ、実はこれらの現存伝本にあたる写本なのである。該当資料は以下の三点四冊である（以下「松平文庫本」と総称。白抜き数字の序数は前項を引き継ぎ、矢印で後鑑本との対応関係を示した。注記内容は前項と同じ）。

⑥「愚句 長祿三―文明十一」（二四二・一一）二冊

↓②連歌之事、愚句（自長祿三年／至寛正六年）（上）、

③連歌之事、愚句（自寛正七年／至文明十一年）（下）

⑦「山何連歌 長祿二・二・五」（一四二・一一）

↓④「連歌之事、独吟百韻（長祿二年二月五日）」

⑧「何人連歌 応仁元・十・十七」（二四二・一二）

↓④「連歌之事、独吟百韻（応仁元年十月十七日）」

また、前項同様に書誌を示す。

書写年、装丁、寸法は前項と同じ。

外題は、左肩貼題簽墨書（同筆）⑥「愚句（自長祿三年／

至寛正六年）」（上冊）、「愚句（自寛正七年／至文明十一年）」（下冊）、⑦「獨吟百韻（長祿二年／二月五日）」、⑧

「獨吟連歌（応仁元年／十月十七日）」、全て脇に「飛鳥井

栄雅歌書」との注記がある。本文別筆。内題は、⑥は上

下冊ナシ、⑦「賦山何連詠」、⑧「賦何人連詠」。料紙は楮

紙。半葉十一行、一句一行書。本文は各別筆。奥書は⑦

「右百韻者長祿二年二月五日以／閑日独吟之爰當年任槐事／可望申之仍發句聊述其意也」（本奥書）。また③巻末に「法皇勅點右三十九句／関白兼良公四十三句」との合点識語。印記ナシ。

以上の三点は、歌書の場合と同様、外題の「飛鳥井栄雅歌書写」という注記のために、全て飛鳥井雅親作と看做されてきたものである。特に⑥「愚句」は、紹介以来今日まで、雅親の句集として珍重され、数度の影印・翻刻が行われている。²²⁾

定数歌の例をもつてすれば、松平文庫本の三書は皆、義政の句集・百韻である可能性が高い。だが、逆に後鑑「義政句集」が雅親の著作である場合もある。順に検討を行う。

まず、⑥「愚句」上下冊（後鑑本②・③）は、付句が新撰菟玖波集に入集されているため、義政の句集として確実である。²³⁾十句が「慈照院殿入道贈太政大臣」（義政）の作として取られている。以下は一例（愚句、新撰菟玖波集の順にしめす。本文・句番号は何れも『連歌大観』による）。

⑥愚句・上冊「長祿三年四月廿六日百韻」

とふ人あれやおもひこたへん（三九）

すみあらすむくらのやとのひとりねに（四〇）

・新撰菟玖波集 恋連歌中 長祿三年四月家にて百韻の連歌に

とふ人あれやおもひこたへん（一九四一）

慈照院殿入道贈太政大臣

すみあらすむくらのやとのひとりねに（一九四二）

また、現存する義政参加の百韻写本にも、本集所収の付句が、義政（連歌字・桐）の句として見えている。²⁴⁾

次に後鑑本④に該当する⑦「山何連歌 長祿二・二・五」・⑧「何人連歌 応仁元・十・十七」であるが、これらは新撰菟玖波集に入集していないため、それぞれ、別の検討方法をとる必要がある。

⑦「山何連歌 長祿二・二・五」には、書誌に示したように、以下の本奥書（識語）が存在する。

右百韻者、長祿二年二月五日、以閑日独吟之、爰當年任槐可望申之、仍發句聊述其意也

すなわち長祿二年（一四五八）が作者にとって「任槐」、つまりは任大臣を望むべき年であること、発句にその意思を詠み込んだ旨が記される。飛鳥井雅親の極官は大納言であり、これには該当しない。長祿二年七月二十五日、祖父・義満の先蹤に倣い、二十三歳にて任内大臣の命をうけた足利義政こそ、この記述に相応しい。この時彼が詠んだ発句は以下である。

わか柳かけなひくへき砌かな

「かげなびく」とは、「影靡く星」、すなわち「内大臣」をさす語である。初句「わか柳」は、「柳」に「柳營（將軍）」をかけているのであろう。若き將軍が大臣になるべき時がきた。まさしく、自らの意志を示した句である。

さて、残る⑧「何人連歌 応仁元・十・十七」には、⑦のような奥書が存在しない。これを義政作とする決定的な証拠は見いだせない。ただ、巻末識語に見えるように、この百韻は後花園法皇と一条兼良の批点を得ている。歌道宗匠たる雅親が、専門歌人ではない天皇（上皇）や関白に詠作の批点を乞うことは考えにくい。状況証拠ではあるが、同時期、両者に盛んに点を

乞うていた義政が、作者としては妥当であろう。⁽²⁶⁾

松平文庫本の連歌資料三種は、全て義政の著作と結論してよいだろう。これにより、⑥「愚句」のように、現在雅親の句集として言及が進んでいる書に関しては、内容を義政のものとして、至急考察し直す必要がある。

他方で、義政研究の視点でみれば、これまで後鑑の収載本に頼らざるを得なかった著作に、拠るべき伝本を見出しえたことは僥倖である。松平文庫本の本文は、歌書資料と同様、良質なものが備わっている。⁽²⁷⁾ 義政の連歌研究の基礎となる資料として、新たに位置づけられるべきであろう。

むすび

以上、義政の文芸資料につき、読解利用に堪うるまとまったテキストを確保するため、家集・連歌資料の基礎的側面を検討した。

義政の既知の家集二種のうち、慈照院殿義政公御集(家集(1))については、もはや義政の集としての利用価値はほとんどなく、また、源義政集(家集(2))についても現行の翻刻テキストでの読解は難しい。本稿では、これらに替る基本資料として家集(2)と同内容の善本、松平文庫蔵「飛鳥井栄雅歌書写」外題本の価値を指摘し、関連して従来、飛鳥井雅親の著作とされていた連歌資料が、既知の義政連歌書と同種のものであることを明らかにした。

義政連歌資料への共通理解の不足は、一つに文学研究における、後鑑の知名度の低さに原因があるように思われる。しか

し、それは元をたどれば、足利將軍家の文芸事績研究自体の遅れに起因するものである。

もとより彼らの本務は政治であり、文芸活動はあくまでそれに付随する一要素に過ぎない。しかし、権力の集中するところに文芸が栄えるのは世の常である。彼らがどのように接し、また作品を為していったのか。残された作品を丹念に読み込むことで、明らかになる事実も多々あろう。本稿は、そのための準備の一つである。

注

(1) 山内葉子「足利義政論―その和歌を中心に―」(立教大学日本文学19、一九六七)、『新編私家集大成中世四』「12義政」解題(大高貴子項目執筆)等。

(2) この二十首は、井上宗雄・中村文編『中世百首歌 八』(古典文庫52、一九九〇)の解題に翻刻される。將軍家千首等他歌書からの抜書と思しいが、全て義政の真作であるか存疑。

(3) 孤本である家集(3)東山殿御詠【尊】については別の機会に検討したい。

(4) 山内前掲注(1)論文。

(5) 第一類のうち書写年代の比較的新しい【神】・【拾】・【群】には、卷末に「義政公詠散在他集者随見聞補入之」とあって、続撰吟集(三十首、後水尾院御撰千首(三首)、常德院義尚公家集(義尚との贈答二首)、室町殿行幸記(二首)から計三十七首が抄出されている(『新編私家集大成』の解題に翻刻)。以下の歌番号はそれによる。このうち室町殿行幸記の二首(三七・三八)は義政の詠。また、続撰吟集抄出の三十首に関しては、現存伝本に所載なく不明とされているが(國枝利久『続撰吟集諸本の研究』思文閣出版、一九九九)、端書の記述をみるに、これは類聚和歌(宮内序書院部蔵御所本・一五四・一)、或いは百首和歌集成(国立歴史民俗博物館蔵

高松宮伝来禁裏本・H・六〇〇・四七〇 函一九三)からの抄出である(二書は同一の書)。このうち「百首統歌」の端書をもつ「霜」詠(二六)は、実相院義運の詠。他は義政の真作で間違いない。

(6) 「中世百首歌 四」補訂「中世百首歌 五」井上宗雄・小池一行編(古典文庫80、一九八二)。川上「文明十四年將軍家千首について―足利義尚歌壇における意義と後世への影響―」(和歌学研究所17、二〇一八・十二)において、將軍家千首(甲類本)からの採歌により、息子・義尚の詠が混入していることを指摘した。

(7) 「内A」はこの部分なく、朱筆で上部に補入されている。

(8) 「伊」以外の伝本では「義昭公筆」とあるが、それでもそもそも「證本不可有疑候者也」と言い切れる必然性がない。

(9) 【後】以外全て「三豆」^④とあるため、単なる誤写とは思われぬ。

(10) 「岸柳」詠の合点は第二類のみに存するが、【高】にはこれにも校合の貼紙注記がある。ただし、当該詠【高】の初句は「をそくとき」であり、この異同には注記がない。

(11) 川上「『慈照院自歌合』の基礎的研究―附・宮内庁書陵部蔵桂宮本の翻刻及び校異―」(三田國文64、二〇一九・十二)。

(12) 例えば、家集(1)三五番「春河」詠は本来「瀆餘寒」題、三一九番「祝言」詠は「嶺松」題の歌である。なお、慈照院自歌合の採歌元の歌題は判明するもののみ、「別表」の「他出詠」↓「歌題」の欄に(一)にて示している。

(13) このうち②慈照院自歌合については、家集(1)の採歌に漏れた詠を検討することで、利用した伝本の系統が推定できる。家集(1)に未所収の自歌合詠は、歌番号(前掲注11)論文による)で、33・34・35・36・44・76・90・92・96・100の十首だが、このうち連続している33・36番歌は、自歌合の番では、十七・十八番である。この番が欠落している伝本は、稿者が注(11)論文で分類したところの三類本第二種に該当する。家集(1)編纂の際の利用伝本である可能性が高い。

(14) 前掲注(2)著書。各定数歌の概要については同問題を参照。

(15) 正保改元後は、グレゴリオ暦ではすでに新年を迎えている。

(16) 三首のうち①寛正三年百首の脱落歌については、第二種の本文においても脱落しており、同系の写本に拠っていることがわかる。

(17) ただし古典文庫は、①上下冊のみ義政百首の単独伝本として紹介し、家集(2)の欠の補填に利用している。

(18) 浅田徹「飛鳥井雅親の定数歌について―基礎的整理―」(国文120、二〇一三・十二)。以降、浅田氏の論はこれによる。なお浅田氏は松平文庫本の検証にあたり、本稿でいう③・④について、内容面から義政真作であることを証明しているが、残る①・②・④についても、全て義政自撰の慈照院自歌合に採歌が確認できるため、確実に義政詠である(前掲注(11)論文)。

(19) なお、ここで言及した六種の定数歌のうち、⑤文明十七年五十首については、冷泉家時雨亭文庫に室町時代後期写の単独伝本『三体和歌・詠五十首和歌 義政』が蔵されている(『中世歌学集続 千首和歌』(冷泉家時雨亭叢書第九六巻)(朝日新聞社、二〇一六)に影印。解題・安井重雄)。松平文庫本⑤との異同はわずかに二首である(冷泉家本、松平文庫本の順にしめす)。

・「霧」(二八)
かすみつる春のなかめにをとらめやうす霧まかふあけほの、山
かすみつる春のなかめにをとらめやうす霧まよふあけほの、やま
・「旅」(四七)

おりしきてさぬるふもとのしはしたに夢こそなけれそよく嵐に
おりしきてさぬるふもとのしはくも夢こそなけれそよくあらしに
「霧」詠の異同は優劣を定めたいが、「旅」詠については、古典文庫本と比較をおこなった安井氏も指摘するように、冷泉家本の本文が意味として自然である。なお、松平文庫本の異同部分は、二箇所とも古典文庫本の本文に一致する。これは松平文庫本が、相対的に家集(2)の本文に近い要素を有することを示している。

(20) 金子金治郎「資料としての句集」『新撰寛政波集の研究』(風間書房、一九六九)。

(21) 伊地知鐵男「『後鑑』所引の『御連歌集』について―柿衛文庫蔵

の『室町殿御発句』・「孤本『室町殿御発句』と『後鑑』附録の將軍義政の「発句之事」」「伊地知鐵男著作集Ⅱ」汲古書院、一九九六〔初出：一九六六・一九七〇〕。『連歌大観 一』(古典ライブラリー、二〇一六)に収録(解題：渡瀬淳子)。なお、両本の異同は多い。

(22) 三書は「(新資料紹介) 肥前島原松平文庫(文学29・11、一九六一・十二)にて初めて紹介され、⑥「愚句」に関しては、荒木尚「『愚句』―翻刻と解説―」(法文論叢(熊本大学) 文科編15、一九六三・七)に翻刻、『連歌集編』(松平文庫影印叢書第九卷)(新典社、一九九四)に影印され(解題：小池一行)、最近『連歌大観 一』(古典ライブラリー、二〇一六)に収録された(解題：佐々木孝浩)。なお、⑦「山何連歌 長祿二年」・⑧「何人連歌 応仁元年」は、『国書総目録』等では義政作者説を注記しているが、松平文庫本として扱われる際は、全て雅親独吟として言及がなされている。

(23) 本句集と新撰菟玖波集との関係については、金子前掲注(20)論文に後鑑本を用いた詳細な検討がある。

(24) 義政参加の連歌会資料としては、以下のものがある。「」は発句。「」は主な所蔵先。

(一)長祿三年六月二十日公方家御会 何木「行水の」

〔静嘉堂文庫(連歌集書三三)／大阪天満宮文庫(二本)〕

*年次の比定は室町殿発句による(但し、後鑑本・柿衛文庫本を対校する必要がある)

(二)寛正二年十一月二十二日内裏百韻 何船「花おもき」

〔国立国会図書館(連歌合集一)・陽明文庫(存二十三句)〕

(三)寛正五年四月二十八日伏見宮渡御之時室町殿百韻 何路「松や千代」

〔統群書類従巻四八〇／静嘉堂文庫(連歌集書一六)／大阪天満宮文庫(二本)〕

(四)寛正六年三月六日大原野花下会百韻 何人「遠くきて」

〔広島大学図書館(さくらかひ)「百句目欠」〕 *『連歌総目録』

未載

(五)応仁二年正月二十八日殿中百韻 山河「花や星」

〔静嘉堂文庫(連歌集書一六)／大阪天満宮文庫(二本)〕

(六)文明十四年三月二十日長谷前大僧正道興坊百韻 何人「ちきりあれや」

〔静嘉堂文庫(連歌集書二三)／北海道大学北駕文庫〕

*芳翰模範(西尾市岩瀬文庫)に飛鳥井雅康筆連歌懐紙の模本がある(後半欠)

このうち⑥愚句には、「四・伍」が所収されている。

(25) この語については、和歌における用例を扱った、佐藤明浩「かけなびく」考―大臣在任を表す歌ことば―「院政期和歌文学の基層と周縁」(和泉書院、二〇二〇〔初出：二〇一七〕)がある。

(26) 例えば、義政は応仁二年(一四六八)五月七日の自身の歌会詠の合点を法皇に求め(東山殿御度々御会寄「早稲田大学中央図書館蔵」)、兼良に対しては、文明二年(一四七〇)九月二十一日に奈良へ詠草を送り批点を請うている(大乘院寺社雑事記)。

(27) 後鑑本(国史大系)において「マ、」とあって読解不能であった箇所が悉く解決する他、⑧の応仁元年独吟百韻については、これまで不完全であった後花園院・一条兼良の合点を完備する。

〔付記〕 本稿はJSPS科研費(課題番号15K04211)による成果の一部である。

(かわかみ・はじめ)

〔別表〕 慈照院殿義政公御集（家集①） 他出一覧表

凡例

・慈照院殿義政公御集（家集①）に収録される三二〇首の出典歌を一覧した。
 ・上段に「慈照院殿義政公御集」の全三二〇首を「歌番・歌題・初句」の順に、下段に各歌の他出（引用元）とみられる歌を「他出歌書（名）・歌番・歌題・作者」の順に掲出した。

・他出歌書のうち、慈照院自歌合や統撰吟抄のように、さらに典拠とする歌書の存するものは、備考に該当書名・歌番号・歌題を示した。
 ・歌題が他出歌書内では確認されず、その典拠となる歌書によって明らかになるものについては、「（ ）」にて歌題を示している。
 ・作者欄には、他出歌書によって他人の詠と判明したもののみ、その作者名を示している。

・「慈照院殿義政公御集」と他出歌書（或いはそのさらに出典の歌書）の初句に異なる存するものは、備考にその旨示した。
 ・重出歌、或いは他出歌書が複数あるものに関しては、備考にその旨を示した。
 ・他出歌やその出典歌の歌番号・引用については、家集は『新編私家集大成』、義政の定数歌は『中世百首歌 八』（古典文庫五三二、一九九〇）、道興の定数歌は『中世百首歌 四』（古典文庫四六五、一九八五）により、その他は以下によった。

慈照院自歌合：川上一「慈照院自歌合」の基礎的研究―附・宮内庁書陵部蔵桂宮本の翻刻及び校異―（三田國文六四、二〇一九）。
 將軍家千首：天理図書館蔵「武家千首」（請求記号：九一・二五／イ四三三）。歌番号は稿者の集計による。
 統撰吟抄：『統撰吟抄 上（下）』（古典文庫五八〇・五八五、一九九五）。

公宴統歌：『公宴統歌 本文編（索引編）』（索引叢書四六）（和泉書院、二〇〇〇）。
 康正元年内裏歌合：宮内庁書陵部蔵桂宮本「歌合」（請求記号：五一〇・二三八）所収本。歌番号は稿者の集計による。
 東山殿御詠：前田育徳会尊経閣文庫蔵本（請求記号：一三・二二・書）。歌番号は稿者の集計による。

・最上段に「○」のあるものは、現状出典不明の独自歌である。

慈照院殿義政公御集			他出歌（出典歌）			備考	
歌番	歌題	初句	他出歌書	歌番	歌題		作者
○	一立春	春 くれてゆく	—	—	—	—	備考
二立春	春	いつるひの	慈照院自歌合	一	〔立春〕	—	
三立春日	日	はるきぬと	將軍家千首	三	立春日	—	
四早春	春	あまつかせ	慈照院自歌合	二	—	—	
五山早春	春	ゆくとしや	文明八年百首	一	山早春	—	
六河早春	春	けさよりは	將軍家千首	三	早春河義尚	—	

三	苗代	いまはまた	続撰吟抄	三六	苗代道興	道興長祿二年百首一六
五	松藤	たにみつを	続撰吟抄	三七	松藤	道興長祿二年百首一九
五	藤	ひらきたる	文明八年百首	元		初句「ささかかる」
兜	岸款冬	さくらはなの	文明八年百首	一八		初句「さくはなの」
兜	庭董菜	はるかせの	続撰吟抄	三七		道興長祿二年百首一八
兜	名所春曙	いくとしの	文明八年百首	一六		初句「いくとせの」
兜	花慰老	うつしはつる	文明八年百首	三五		
四	落花	いまはまた	続撰吟抄	二	道興長祿二年百首一四	
四	盛花	ふきとふく	続撰吟抄	三六	道興長祿二年百首一四	雪玉集四一一
四	遠尋花	はなとみし	文明八年百首	二八		
四	独待花	このころは	文明八年百首	三		
四	待花	みればけさ	続撰吟抄	二		
元	花洛春月	さきにはふ	文明八年百首	一七	後柏原	
元	春夜夢	くるるまで	将軍家千首	二〇	後土御門	
毛	三月尽	ほともなく	文明八年百首	九〇		
冥	梅	あめつちの	慈照院自歌合	二〇		文明二年百首三
三	春河	たにかはや	慈照院自歌合	九		文明四年百首二
三	若菜	なかをかや	慈照院自歌合	八		文明四年百首二
三	浦春	このころなき	慈照院自歌合	七		文明十三年百首六
三	名所霞	あけやらぬ	慈照院自歌合	六		文明八年百首一五
三	山霞	やまひとの	慈照院自歌合	五		文明八年百首一五
三	霞	かみよより	慈照院自歌合	四		文明二年百首一
三	霞	かみよより	慈照院自歌合	三		公宴続歌三四〇四

		○										○					○		○			
丸	宀	矣	壺	齒	彡	彡	彡	宀	宀	宀	宀	宀	宀	宀	宀	宀	宀	宀	宀	宀		
故郷萩	行路初秋	千鳥	篠霰	谷寒草	関時雨	里擣衣	沼月	近初雁	夜露	山鹿	嶋瞿麦	籬蘭	初雁	杜夏祓	村夕立	舟納涼	滝下蛩	夏祓	夏草滋	夏草	杜蟬	
けふはまた	そてにちる	ちとりなく	つゆならは	たにかはや	あつまちや	きこえくる	あめすくる	はるやゆめ	つきはまた	ゆふくれは	こころありて	みしはるは	ふるさとに	かせそよく	みそきする	すきやらて	かせそよく	ぬきとめぬ	はらひすてし	にはのおもは	わけかへる	なくせみの
文明八年百首	文明八年百首	—	將軍家千首	將軍家千首	將軍家千首	將軍家千首	將軍家千首	將軍家千首	將軍家千首	続撰吟抄	文明八年百首	続撰吟抄	続撰吟抄	—	文明八年百首	文明八年百首	文明八年百首	文明八年百首	—	文明八年百首	—	続撰吟抄
元	冥		五五	五六	五六	四五	四九	三七	三三	三六	三	三五	三五	五	五	三	三		三		三五	
故郷萩	行路初秋		篠霰	谷寒草	関時雨	里擣衣	沼月	近初雁	夜露	山鹿	嶋瞿麦	籬蘭	初雁	杜夏祓	村夕立	舟納涼	滝下蛩		夏草滋		杜蟬	
			後土御門	義直	後土御門	後土御門	義直	義直	義直	道興		道興	道興								道興	
慈照院自歌合四一。家集二五四と重出。								初句「はるやなつ」		道興長祿二年百首四四		道興長祿二年百首四一	道興長祿二年百首四三								道興長祿二年百首三三	

二〇	野虫	かれそむる	続撰吟抄	三六	野虫	道興	道興長祿二年百首四二
二九	月	のへはみな	続撰吟抄	三八	月	公条	
二八	故郷露	ひとはなほ	—	三〇			
二七	聞擣衣	あきのくさ	文明八年百首	三二	聞擣衣		
二六	夕初雁	あはれうき	文明八年百首	三三	夕初雁		
二五	松間月	くもりなき	—	三五			
二四	浅茅月	かせそふく	文明八年百首	三六	浅茅月		
二三	葛風	ちかくみる	—	三七			
二二	浪上月	ふけゆけは	文明八年百首	三八	浪上月		
二一	見月	かすかすに	続撰吟抄	三九	見月	道興	
二〇	待月	われのみそ	続撰吟抄	四〇	待月	道興長祿二年百首四六	
一九	秋(林歎)月	いにしへの	文明八年百首	四一	秋月		
一八	関月	あきかせの	文明八年百首	四二	関月		
一七	柚月	おのつから	文明八年百首	四三	柚月		
一六	田家鹿霧	さをしかを	文明八年百首	四四	田家鹿霧	底本欠、他本にて補う。初句「をしがなく」。	
一五	叢露	あはちしま	文明八年百首	四五	叢露		
一四	鞆中嵐	おきあまる	—	四六			
一三	山家夜	ふもとは	—	四七			
一二	ね覚荻風	ききわひぬ	文明八年百首	四八	寝覚荻風		
一一	柚檜	そまやまや	將軍家千首	四九	柚檜	後土御門	
一〇	織女後朝	たなはたに	文明八年百首	五〇	織女後朝	慈照院自歌合三七。家集二五〇と重出。	
九	閑居薄	つゆはらふ	文明八年百首	五一	閑居薄		

一四	寄郭公恋	くらしかね	將軍家千首	七八	寄郭公恋	道興	
一四	寄蛙恋	なみたかは	將軍家千首	七四	寄蛙恋	義直	
一四	寄鏡恋	われてあふ	將軍家千首	七五	寄鏡恋		
一四	寄木綿恋	いのりきて	將軍家千首	七〇	寄木綿恋	宣胤	
一四	寄織恋	おもふえに	將軍家千首	七五	寄織恋	義直	
一四	恋	つれなさの	慈照院自歌合	七	〔不逢恋〕		文明四年百首七一
一五	恋	ほとへても	慈照院自歌合	七	〔不逢恋〕		
一五	祈恋	いくとせに	慈照院自歌合	七	〔祈恋〕		初句「いくとせぞ」。文明八年百首八一。
一五	契恋	わかいのち	慈照院自歌合	七	〔契恋〕		文明四年百首八八
一五	寄枕恋	おもひわひ	続撰吟抄	三四	寄枕恋		
一五	寄月恋	さやかなる	將軍家千首	六〇	寄月恋		
一五	行路梅	ふきおくる	続撰吟抄	三四	行路梅		
一五	余寒月	はるのよの	將軍家千首	五	餘寒月		
一五	藤	うちなひく	慈照院自歌合	九	〔藤〕		
一五	岸柳	たつたかは	慈照院自歌合	二	〔岸柳〕		文明元年百首九
一五	帰雁	しかのうらや	慈照院自歌合	三	〔雁〕		
一六	花	うつしうる	慈照院自歌合	三	〔栽花〕		文正百首一二
一六	花	たかよより	慈照院自歌合	四	〔惜花〕		將軍家千首一五六。家集二五一と重出。
一三	水辺花	はるのいけの	慈照院自歌合	五	〔水〕		
一三	散花	ちりかかる	慈照院自歌合	六	〔散〕		
一三	岩根花	いはねふみ	慈照院自歌合	八	〔岩〕		
一三	寄花述懐	あはれみの	慈照院自歌合	七	〔花〕		長祿寛正頃百首一八
一六	松藤	はるをへて	慈照院自歌合	〇	〔松藤〕		

一六	名所月	やへたちし	慈照院自歌合	五	一		
一八	浦月	あまひとの	慈照院自歌合	五	一		
一七	田家鹿	こころあらは	慈照院自歌合	五	一		
一六	鹿	またしとは	慈照院自歌合	四	一		
一五	女郎花	さくはなは	慈照院自歌合	四	一		將軍家千首三三三
一四	藤袴	むらさきの	慈照院自歌合	四	一	(蘭露)	
一三	閑居虫	なくむしの	慈照院自歌合	四	一		
一三	秋夕	なかくめつる	慈照院自歌合	四	一		初句「なかくめつる」
一八	江蛩	なつかりの	將軍家千首	二五	江	蛩	
一八	沢杜若	かきつはた	將軍家千首	二五	沢	杜若	
一七	首夏	くものうへに	將軍家千首	二〇	首	夏	
一七	夏月	なつといへは	雅康卿詠草	二三	浦	夏月	雅康
一七	水鶏	やまひこの	慈照院自歌合	三	一		
一六	川五月雨	やまかほの	慈照院自歌合	三	(五月雨)		長祿寛正頃百首二八
一五	五月雨	つきてふる	慈照院自歌合	元	一		
一四	沼菖蒲	ますけおふる	慈照院自歌合	元	(沼蒲)		文明元年百首二七
一三	菖蒲	けふこそは	慈照院自歌合	二七	(昌蒲)		長祿寛正頃百首二三
一三	時鳥	やとちかく	慈照院自歌合	二六	(鸛)		文明二年百首一七
一七	初時鳥	まてはうき	慈照院自歌合	二五	一		初句「まてはうき」
一七	軒橘	みにはまた	慈照院自歌合	二四	一		
一六	新樹	はなちりし	慈照院自歌合	二三	一		
一六	更衣	なのみして	慈照院自歌合	三	一		
一七	首夏	さくらいろの	慈照院自歌合	三	一		

	○							○	○	○	○	○										
三三	三一	三〇	二九	二八	二七	二六	二五	二四	二三	二二	二〇	一九	一八	一七	一六	一五	一四	一三	一二	一一		
初冬	残菊	七夕雲	七夕人事	水辺月	山紅葉	江月	江月	々	※2	草花	草花	旅人渡橋	々	祝	祝	搦衣志(念敷)	色葉	秋山	宿搦衣	搦衣		
したひこし	ふゆきても	くるるまの	ありかほに	くもらすよ	たかために	いつくにか	たまつしま	ひとしれぬ	わかのうらに	むしのこゑ	いろみせて	ゆきくれぬ	いほしむる	くやしくそ	うこきなき	さらになま	あきさむく	つゆしもの	ときはきも	みしはなの	あまひとは	
慈照院自歌合	一	將軍家千首	雅康卿詠草	將軍家千首	將軍家千首	草根集	草根集	一	一	一	一	公宴統歌	一	一	一	文明八年百首	慈照院自歌合	慈照院自歌合	慈照院自歌合	慈照院自歌合	慈照院自歌合	
五	三三	一四	四六	四七	三〇八	八〇六						三六六			一〇〇	三三三	五	五	五	五	五	
(初冬)		七夕空	七夕人事	水辺月	山紅葉	江月冷	江上月					旅人渡橋			祝言	搦衣志			一	一	一	(古寒月)
			雅康			正徹	正徹															
文明四年百首五六								々	※2 飛鳥井入道のもとへよみてつかはし侍る十五首の内				々								文明四年百首五〇	

三五	惜花	たかよより	將軍家千首	一五	惜花		
三三	紅葉	ふくかせも	慈照院自歌合	六	〔風前落葉〕		寛正三年百首五二〔初句「ふくかせの」〕
三四	霜	ひかけさす	慈照院自歌合	六	〔庭霜〕		文明四年百首五八
三五	冬枯	おくしをも	慈照院自歌合	三	―		
三六	水	やまのゐの	慈照院自歌合	三	―		
三七	河水	みななみは	慈照院自歌合	三	―		
三八	千鳥	つきのこる	慈照院自歌合	三	〔暁千鳥〕		寛正三年百首五六
三九	名所千鳥	ゆふきりに	慈照院自歌合	六	―		
三〇	竹雪	こしちには	慈照院自歌合	六	―		
三一	網代木	したくくる	慈照院自歌合	六	〔網代〕		文明元年百首六四
三二	山路水	やまかけや	慈照院自歌合	七	―		
三三	山雪	けさははや	慈照院自歌合	七	―		
三四	月前時雨	このころの	慈照院自歌合	五	―		
三五	水鳥	しもはらふ	康正元年内裏歌合	五	水鳥		
三六	松雪	したをれの	康正元年内裏歌合	三	松雪深		
三七	野雪	ふみわけし	將軍家千首	五三	野雪		
三八	残菊	おしなへて	康正元年内裏歌合	二	庭残菊		
三九	深雪	いろわかぬ	文明八年百首	六	深雪		
四〇	湖水鳥	まのうらや	文明八年百首	六	湖水鳥		
四一	湊千鳥	あまおふね	文明八年百首	六	湊千鳥		
四二	炭竈煙	あけぬるか	文明八年百首	六	炭竈煙		
四三	歳暮近	いたつらに	文明八年百首	七	歳暮近		初句「いつたらに」
四四	※3	きみかへん	続撰吟抄	三七	〔松為久友〕		※3 寛正五年十二月五日、仙洞三席御会の歌

				○							○				
三九	三八	三七	三六	三五	三四	三三	三三	三一		三〇	三〇九	三〇八	三〇七	三〇六	三〇五
祝言	寄松祝	古寺	江船	夕稲妻	小鷹狩	月前露	返し	※6	※5	岸柳	※4	尺教	神祇吉田	往事	
いくよまで	けふひかん	たかねより	ふなひとそ	はなすすき	のへとほき	ひさかたの	ももくさの	ももくさに	くちのこる	おそくととき	はるかせに	まよひゆく	かみもさて	ひにそへて	
慈照院自歌合	続撰吟抄	草根集	草根集	—	草根集	草根集	文明八年百首	文明八年百首	続撰吟抄	続撰吟抄	—	文明八年百首	將軍家千首	文明八年百首	
九	三四六	七五	七五		八七七	八三三	一〇三	一〇一	三三三	三三六		九	九五	七	
〔嶺松〕	寄松祝	古寺	江舟		小鷹狩	月前露	—	—	花園 <small>（ついで）</small> と云所にて花を御覽せられ	岸柳		尺教	日吉	往事	
	兼良	正徹	正徹		正徹	正徹	雅親			兼良					
初句「いくよまで」。公宴続歌四〇九七。							三一一の返歌	※6 飛鳥井雅親のもとへ独吟百首の点をこひにつかはしけるに、五十二首に墨印をつけて	※5 花園と云所の花を見て、むかしをおもひ出て、哀もよほしければよめる		※4 東求堂銀閣ニテ人々会せしに、尋余花				